

はじくあり、其跡とみえ、頂上大に凹にして、いかにも盜人の所爲の跡と覺ゆる、天子の陵なれ、西面にして谷の細川南を流れ、池などの跡とも見えず、然とも祟にて上賀茂近きとて、柏原へうつされし程の所なれば、今少入念あらんか、甚窮窟の地なり、大龜谷谷口町の北側、水茶屋の庭より入、うらの山麓にあり、此茶店陵戸と覺ゆる、天明大火後、大火の事、禁裏の女中などより何か俗事申なし、九條殿の御領にて、深草の莊屋長谷川太郎兵衛此陵の木をきりし故、九條殿御相續の障りなし、異説も出で、此御陵へ度々御内々の御使あり、千年御忌にも御内使立し故、此陵上の凹を平均して陵のかたちを失ひ、茶店のうらより至る所を分道に直し、天子の御陵を東面にしたり、猶糺すべし、

〔公衡公記〕弘安十一年二月廿五日、官人章貞來、召取山陵犯人津國島天皇上陵勸賞事申入云云、付長官體天申入、自内々又可存知之由示之、贓物御鏡持來之、然而明後日伊勢幣家君御神事也、仍不取入返給、仰聞食之由畢、

〔高國記〕柳本高屋合戰之事

其時分河内國ノ守護ハ畠山種長ナリ、父尙慶十八歳ニテ入道シト山ト云、高屋ノ城ヲトリ立テ子息ニユヅリ、紀州廣ト云所エ隱居シケル、此高屋ノ城、昔安閑天皇ノ御廟ナリ、然レバ要害ヨケレバトテ城ニ築立ラレケレドモ、本城ニハ恐レテ畠山殿モ二ノ丸ニ住シケル、柳本此時勢ヲ分テ、二千餘人高屋城エ馳向ヒ、其マ、押寄責ケレバ、種長難儀シ、已ニ被責落ト見ユル事度々也、○申此城ニ一ノ不思議アリ、安閑天皇ノ御廟ヲ城ニ用テレシ故ニヤ、大和路ノ水越ト云道ヨリ、城ニ入ル者生テ歸ル事ナシトテ、水越路ヲムカシヨリ明道ニテ、手向ノサタモナカリケル、

〔前王廟陵記上〕古市高屋丘陵、○安閑天皇ノ御廟ヲ城ニ用テレシ故ニヤ、大和路ノ水越ト云道ヨリ、或曰、今高屋村城山是也、○明應中、畠山、或曰、近年土民發陵、得古代器物等、